毎月一回15日発行 昭和48年1月15日発行・第38号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

リベルテール

1 月 号

Libertaire VoL,Ⅳ,No1

無政府主義者の機関紙

九月四日第三種郵便物認可
一月十五日発行第三種郵便物認可
三百一〇〇円（送料共）

リベルテール　一部　100円

Le Libertaire　毎月一回15日発行

昭和48年1月15日発行　Vo, Ⅳ No 1

編集兼発行者　三浦精一

発行所　東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方
リベルテールの会

（振替東京133830番　三浦精一）

目　次

選挙そして民主主義とは　三浦精一　1
公害と鉱害　杉藤二郎　7
―戦後の思い出　8―
書評
小松隆二著『日本アナーキズム運動史』　三浦精一　12
政治の終焉と論理の不毛性　VOL　16
野火　18

選挙そして民主主義とは

三浦精一

例の如く鳴物入りの騒々しい選挙もすんで、一九七二年は静かに暮れてゆく。と思っていたら十二月二十六日にリベルテール関係者は一斉捜査を受けた。「爆発物取締罰則違反被疑」によるもので、昨年九月頃北海道庁爆破事件に関係したという某君が、この二、三ケ月リベルテールの集会に来て、いろいろ手伝ってくれていたので同君の逮捕を機として捜査が行われたものである。もちろん、そのような事件には関係はないことは明白なのにこうした捜査をやったのは、多分リベルテールの実体を知りたかったのだろうと想像する。そして多分デッチあげによるフレーム・アップにまでは進まないだろうと思う。これが民主主義日本の国家権力が、この年末に微小な、何の組織も持たないリベルテールに対して行った事実で、われわれの間に一抹の不安を投げかけたことも事実である。いずれにせよ、われわれが最初からの非暴力主義をつらぬくことに変りはない。

経済大国、警察大国、そして軍備大国と言われる日本が民主主義国家と称し、アメリカもロシヤもそう称している。民主主義とは何なのか。誰にでも聞いて見るが良い。二十才になったら選挙権をもらって、投票によって代議士を国会に出して、そこで何もかもきめてもらうのが民主主義だと言うだろう。商品を売るために消費者は王様だと言った式で、一票を欲しさに主権者の投票者にその時だけペコペコするし、そのために選挙違反も平気でやり、当選したら党首や派閥の陣笠として動くに過ぎないと、考える人間はいたって少ない。

民主主義とははたして何なのか。それはデモクラシーの訳語であるという。ではデモクラシーとは何か。それはギリシャ語のデモス（区民）とクラティア（優先）の結合から出来たデモクラティアを語源とする。クラティアは権力とか支配とかにも訳されているが、動詞クラテオが勝つとか制するという意味があり、名詞のクラトスは力を意味することから大体想像できるだろう。

歴史的にはアテナイの民主主義はBC五九四年のソロンの立法によって、貧者の借財を帳消しにし、身体を抵当にすることを禁じ、貴族支配を改めて市民を収入によって四階級に分け、異った権利を与えたことに始まる。この改革によって金権政治への道を開いたことになって、

貴族と民衆の不満を買い、彼が規定した法の前での平等を楯に経済上の平等が要求されるに至った。BC五〇九年のクレイステネスの改革は氏族制的四部族制を地域的に十部族制に改編し、それまで「・・の子某」と家柄によって呼ばれていた人々が「・・区の某」と呼ばれるようになった。区民（デモス）の代表者によって五百人の評議会がつくられ、その中の五十人づつが交代で一期間（十分の一年）の国政を行なう。評議会の任期は一年で一度以上の再選は許されない。したがって選挙と抽籤で国民のほとんど全部が政治にたずさわる機会をもった。ヘロドトスもアテナイを最強の国民にしたのはこれだと言っている。

デモクラシーの概念は、このように遠く二千五百年位も前のギリシャにさかのぼるものである。そしてこれは直接民主制と言われるもので、現在行われているものはすべて代表民主制で、国民が議員を代表者として選出しそれを通じて政治に参与するとされている。したがってジェームス・ブライスが言うように「デモクラシーとは国家権力の行使にあたって、できるだけ多数の人民の意志をその過程に参加させることを意図する統治構造である」。そしてそれは一七八九年のフランス人権宣言の「すべての主権の淵源は本来国民に存する」という人民主権の概念にもとずくものである。

民主国家と称する日本で、こうした一連の概念がどのように考えられているか、広辞苑などから拾って見るとしよう。

『人民』、国家、社会を構成する人。特に、国家の支配者に対して被支配者をいう。

『人民主権』、主権が人民に帰属すること。またその主権。民主国、共和国の主権。国民主権。

『主権』、その国家自身の意志によるほか、他の意志に支配されない国家統治の権力、国家構成の要素で、最高・独立・絶対の権力。統治権。

『権力』、他人を抑えつける力。権勢。支配者が被支配者に服従を強要する力。

『政治権力』、社会の諸機能のうち特に政治的機能を行うための権力。その最高地位に属するものは普通国家権力であるとみなされている。

こうした説明は大体日本人の常識とみなしていいものであろう。ところがこれを結合して見ると実におかしなことになる。被支配者である人民が主権者だろうか、人民が国家統治の権力を持っていて被支配者なのか。権力は他人を抑えつけるというが、その他人は人民ではないのか。こんなことを言うのはアラ探しに類することだろ

うが、問題は何故このように全面的に権力がなくてはならないと考えるのか。何故支配被支配を当然と考えるのかということである。はじめに言ったギリシャのデモクラシーは、アテナイの区民たちが、アテナイの問題を皆の問題として、皆で処理しようとしたものだった。政治とはこうした人々の問題を一般化して、皆で処理することである。これがジェームス・ブライスの定義のように「国家権力の行使」という概念を前面に押し出して、「できるだけ多数の人民の意志」を参加させるに過ぎない「統治構造」ということに変質させているのである。この「できるだけ多数の意志」は、選挙というお祭り騒ぎ的な賭博によって、陣笠代議士を多数当選させることで代表され、参加することになるのだ。そして政治とは、人民が人民の問題を一般化して皆で処理しようとすることではなく、広辞苑によれば「権力の行使、権力の獲得、維持にかかわる現象、主として国家の統治作用にかかわるものであるが、それ以外の社会集団および集団間にもこの概念は適用できる」ということになっている。ブライスの言う国家権力の行使が政治なのである。人民の意志を参加させるということは、権力者がするのでなく、人民がするのだという名目をつけるだけのことである。

人間の長い歴史を通じて、常に強者が権力を持ち、主権者として君臨した国家の機構は、王や皇帝が無くなっても変ることなく存在しているのだ。ブルジョアジー（フランス革命のとき勢力を得た第三身分）の支配を確立するために、イギリス式議会政治を採用して、デモクラシーという代議制をつくり上げたに過ぎないのだ。事実上の統治は巨大な官僚機構、警察、軍隊によって行われている。権力機構は別個の存在なのだ、出来るだけ円満に支配するために人民主権の概念をつくりあげたのに過ぎない。主権という言葉の意味をも一度よく考えてもらいたい。これは英語ではソヴレインティで、君主の権力、最高絶対の権力なのである。諸君はこんな絶対権力を持っているのだろうか。持っているとして、これを投票によって委任して政府をつくっているのだとしたら、この政府が抑える抑えると言いながら物価の上がるのを黙認しても、リベルテール関係者が不当に捜査されても、これは主権者である諸君の意志だということになるのだろうか。アメリカ人は「ベトナムの流血はすべて私共主権者の意志だ」と言えるのだろうか。

私はニクソンにも自民党にも投票しなかったと言うだけで済むことだろうか。多数決を原則とする現在の議会では、金と地盤それに巧言冷色、選挙違反、何が何でも群盲の票を集めて多数党をつくれば、一党独裁ができる

ではないか。党内派閥の去就は金で解決出来るし、反対党には時々花を持たせれば済むではないか。そして地方人はおらが国から偉い大臣様が出たと喜ぶのだ。私は中学生の時、早稲田出の英語の先生に政治の話を聞き、新聞の政治記事を読むようにすすめられた。大いに期待して議会記事を読んだが、その時平民宰相と言われた原敬の答弁がヌラリクラリとひょうたんなまず式のものだったのにすっかり失望した。慶応に入って憲政の神様と言われる尾崎行雄の講演を聞いた。講演後に質問が許され学生たちが鋭く質問したのに対する答えは矢張り中心をそらした上手なものだった。私は議会政治も結局政党独裁で、これなら良心的な専政政治の方がまだましだろうと考えるようになった。そして一般の関心は質問や答弁の内容にはなく、むしろいろいろな駈引の方にあるように思われるのも不思議だった。キリスト教徒として愛や誠実といったものを政治の中に見ようとしたことが、私の甘さだっただろうが、こうした甘さは私から消えることはないだろう。

こうしたキリスト教的な善意と政治の世界が全然別の世界であるばかりでなく、陽明学の敬天愛人に生きた乃木将軍にとっても相容れない世界であった。「私の息子を殺した」と叫ぶ母親の声に耳をかたむけ、「陛下の赤子をたくさん死なせました」と天皇の前に頭をたれる凱旋将軍だった。台湾総督になった乃木将軍は歴代最悪の総督と言われて明治天皇に呼び戻されて学習院の院長にされた人だった。アメリカのリンカーンも奴隷解放でありのように尊敬されている人だが、大統領としては悪評高く、その暗殺が喜ばれたような人だった。「人民の、人民による、人民のための政治」という有名な言葉はリンカーンの言葉であるが、誠実な人間がこうした信念で実行することは政治の世界では逆行なのだ。ワシントンもその引退の時「あんな奴が引込んでくれてはじめてアメリカは安泰だ」と新聞に書かれている。政治家としてはイギリス商人との闇取引で日本に狭軌鉄道を押しつけた大隈や、自衛隊は軍隊ではないと強弁して軍備をした吉田の方が人気があるのだ。巨大な官僚機構とブルジョア社会の代弁者政治家によって動いて行く権力機構のどこに、人民主権の入り込む隙間があるか。空にひびく空念仏に踊る人民共よ！　官僚は孫子の代まで親の仇でござると言い切った福沢先生の言葉を、かみしめる位のことはしてもよいのだ。

現在の常識でのデモクラシーはブライスが言ったように統治機構なのだ。ホイットマンやカーペンターがうたい、石川さんやルクリュの考えたデモクラシーとは違う

のだ。アテナイのデモクラシーも、言わば人民の問題を処理するための委員会のようなものに過ぎなかった。

権力機構を維持するために、権力者階級が採用した統治の制度が現在の民主制である。権力主義者マルクスもこの意味での民主主義者である。帝王であろうと、書記長であろうと、委員長であろうと、権力者である限り、その実体には何の差もないのだ。若き日のマルクスが如何に熱情的な人道主義者であった所で、あの暴君ネロも詩人だったではないか。人間誰しも一片の真実や熱情は持っているのだ。しかしその底にある権力愛が制度を階級化して支配機構をつくるのだ。

もう一度「主権」について、そして「権力」について考えて見ようではないか。主権は国家統治の権力で最高・独立・絶対の統治権であり、権力は他人を抑えつける力で支配者が被支配者に服従を強要する力である。諸君はこんな主権者なのか。ちがう、僕は主権など持ってはいない。そして天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらずと信じている。こう信じる自主性をもつ独立の思考者である。この思考者は王陽明が言ったように、山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難しと、しみじみと自己の実存を見つめる。原罪の恐しさに慄える微少な存在だ。僕の何処に、人をスパイと呼び、リンチを加えるような権力があるだろうか。むしろ、同行二人、白衣に身をつつんで四国参りをしたいくらいだ。だが君は主権者なのか。

権力主義者によってすりかえられた民主主義を素朴に信じる人たちは、主権者としての一票を投じる。開票となれば、私の投票した人はどうだったかと、競馬の馬券を買った人たち同様に胸おどらして一喜一憂する。候補者の方では乗るかそるかの賭博で、数千万の選挙費用をかけて違反も平気である。本当に大衆の望む所を代表できるからこんな大きな投機をするのだろうか。当選したらこんな出費以上にすぐ取返せるし、それに名養も得られるからではないか。投票資格がないと言われる山谷や釜ケ崎に行く候補者は居ないと言われる。山谷や釜ケ崎などでは働ける者はどうにか食える。しかし老人は雇っても貰えない。食堂の残飯にありついても、どこで寝るのだろう。地下道も時間がくれば追い出される。本当に代表してもらっても良いのはこの人たちではないか。諸君の中で宮沢賢治の『雨ニモマケズ、風ニモマケズ』という詩を知らない者はいないだろう。「東に病気のこどもあれば、行って看病してやり、西につかれた母あれば、行ってその稲の束を負い、南に死にそうな人あれば、行ってこわがらないでもいいといい、北にけんかやそしょ

うがあれば、つまらないからやめろといい・・・」。庶民の求めるものはこうしたことで、庶民の代表者はこうしたことをする人だろう。こうした問題を皆で処理するのが真実の政治なので、議会で演説ぶったり、喧嘩することは演技に過ぎず、底辺の庶民には何の関係もない。人間に階層差をつける権力社会の、すりかえられた民主主義をふりかざして、何が革新政党だ。

投票が権利だったら、投票しないことも自主的な当然の権利ではないか。権力機構の実体を直視して真の人間の在り方、在らねばならない姿を考える。

権力は、ヨーロッパ人が侵入してくるまで、南洋諸島の民族にとってはタブーだった、酋長の食物に手を触れた者は死ぬとさえ考えられていた。こうした考え方は日本にもあり、「さわらぬ神にたたりなし」といったことわざもある。頭の弱かった大正天皇の皇太子時代、一人でフラフラ出て川に落ちたことがあり、これを救出した船頭は、玉体にふれたというので前科者とされた。しかし一生の生活費は宮内省から与えられたという。権力はこのように神話的な聖性を持つタブーである。皇帝や王に勝ったブルジョアジーは、経済力というも一つの権力を君主権と共に、人民主権という民主主義神話によって組織化してヒエラルキーを温存した。日本の明治維新は皇室の神聖性を強調して幕府を倒し、西洋文化を輸入してもこの神聖性だけは守り抜いた。

マルクスの言うように経済機構だけを変えた所で、決して革命ではない。人間のタブーである権力をそのままにしたら、赤軍派や革マルなどのリンチにも合理化の余地を残すではないか。ロシア革命もシナの易性革命と同じで単なる政権の交代でしかないのだ。

お釈迦さんが王宮を捨てて乞食坊主の集団をつくった意味。キリストがみずから人の子と称し、空の鳥は巣があり、狐には穴がある。しかし人の子は枕する所もないと言った意味。そして老子が、大道すたれて仁義あり、知慧いでて大偽あり、六親和せずして孝慈あり、国安昏乱して忠臣あり。といった意味などをよく考えてもらいたい。権力否定こそは人類の意志なのだ。